

# ひとり暮らし、そしてアクティブ派へ

## — 当研究所「大学生に関する意識調査」より（2） —

森 義博 生活設計研究部 主席研究員  
 篠原 広樹 生活設計研究部 主任研究員  
 横田 直喜 生活設計研究部 主任研究員

当研究所では2010年6月、全国の大学1～4年生の男女4,120名を対象に、現在の生活実態や意識、将来の進路や生活に関する考え方など多岐にわたるアンケート調査を実施した。本誌2011年1月号では、そのうち、生活の実態と意識、社会に対する見方、就労、結婚・出産に関する考え方について、性別、学年といった基本属性を軸とした分析を中心にその概要を報告した。

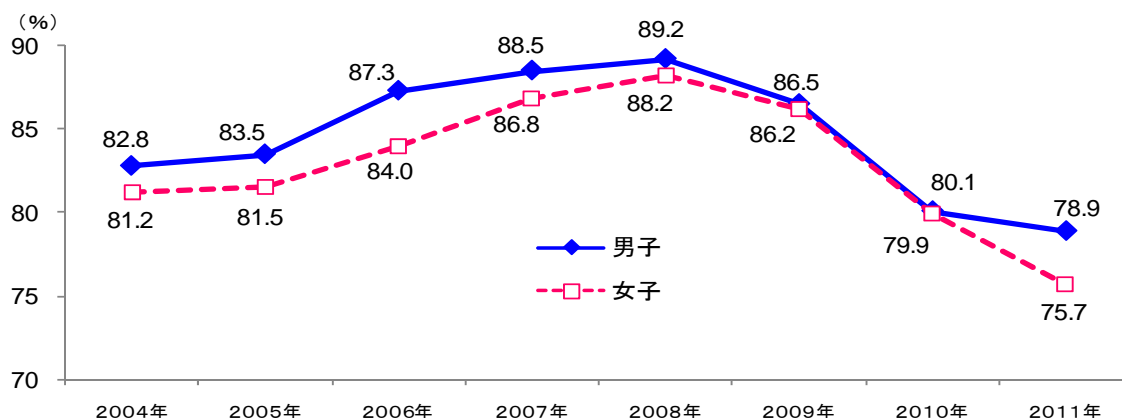
続く本稿では、調査結果とわが国が抱える少子化問題や若年層の就労問題との接点を探ることを試みた。4年制大学への進学率は現在50%を超えている。20歳前後の若者の過半を占める大学生の就労観や結婚観等を多角的に分析することにより、こうした問題の改善に向けた何らかのヒントが見出せるのではないかと考えたのである。

### はじめに — 大学生を取り巻く環境

#### 1. 厳しい就職と不安定な就労

リーマンショック後の企業の採用抑制や若者の大企業志向等によるミスマッチなどから、大学生の就職内定率は低下傾向で、厳しい就職環境が続いている。特に3月11日の東日本大震災により、雇用環境の厳しさはさらに深刻化することが懸念される。

図表1 大学生就職内定率の推移(毎年2月1日時点)



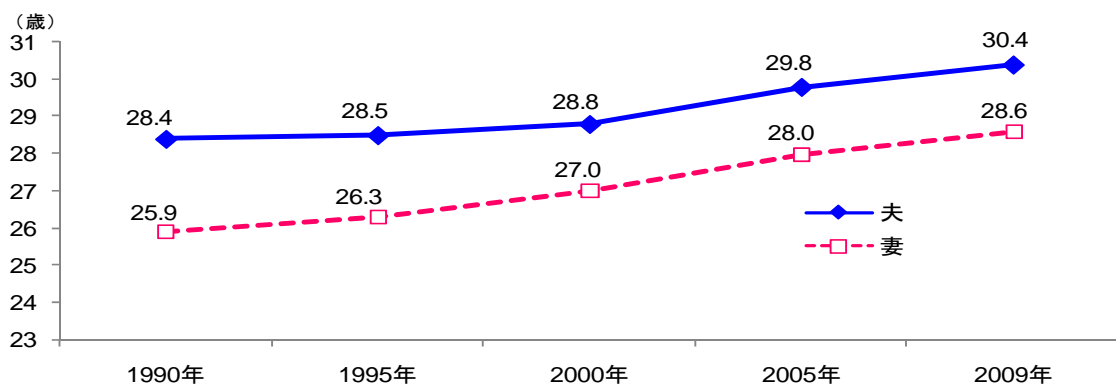
出所：厚生労働省「大学等卒業予定者の就職内定状況調査」

## 2. 未婚化・晩婚化と出生率の低迷

約 20 年前の 1990 年には、男性の平均初婚年齢は 28.4 歳、女性は 25.9 歳であった。しかし、その後、平均初婚年齢は着実に上昇しており、特に女性において顕著である。これは、「見合い結婚」の減少（1982 年：29.4%、1992 年：15.2%、2005 年：6.4%）等による出会いの機会の減少や女性の 4 年制大学進学率の上昇（1990 年：15.2%、2010 年：45.2%）のほか、「女性は収入が高い男性を求める一方、安定した収入を得る若者が減少していることが未婚化の原因である」（山田昌弘中央大学教授編著『「婚活」現象の社会学』）のように、男性の仕事や賃金水準に対する女性の希望と現実の間に大きなギャップが生じていることを原因に挙げる分析も多い。この点については、「結婚・家族形成に関する調査報告書」（2011 年 3 月内閣府）における「年収 300～400 万円の 30 代男性の既婚率 26.5%、年収 300 万円未満では 9.3%」、「正規雇用の 30 代男性の既婚率 29.3%、非正規雇用では 5.6%」との調査結果からも見てとれる。

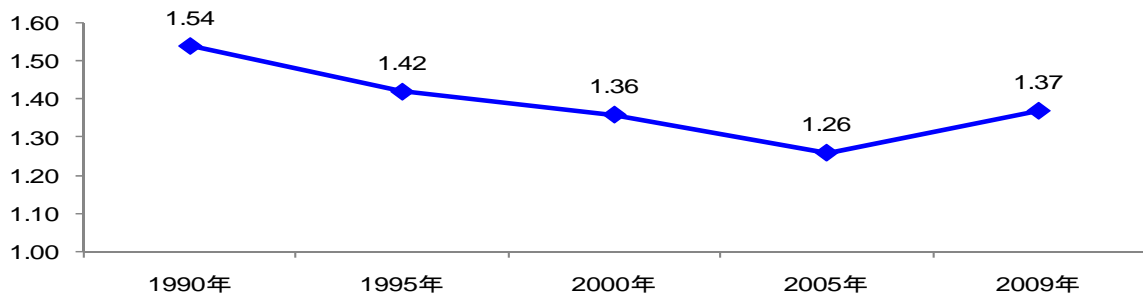
こうした未婚化・晩婚化の進展から、合計特殊出生率は 2009 年で 1.37 と依然低水準である。

図表 2 平均初婚年齢の推移



出所：厚生労働省『人口動態統計』

図表 3 合計特殊出生率の推移



出所：国立社会保障・人口問題研究所『人口問題研究』

## I 性格・タイプ、生活スタイルの違いに着目した分析の試み

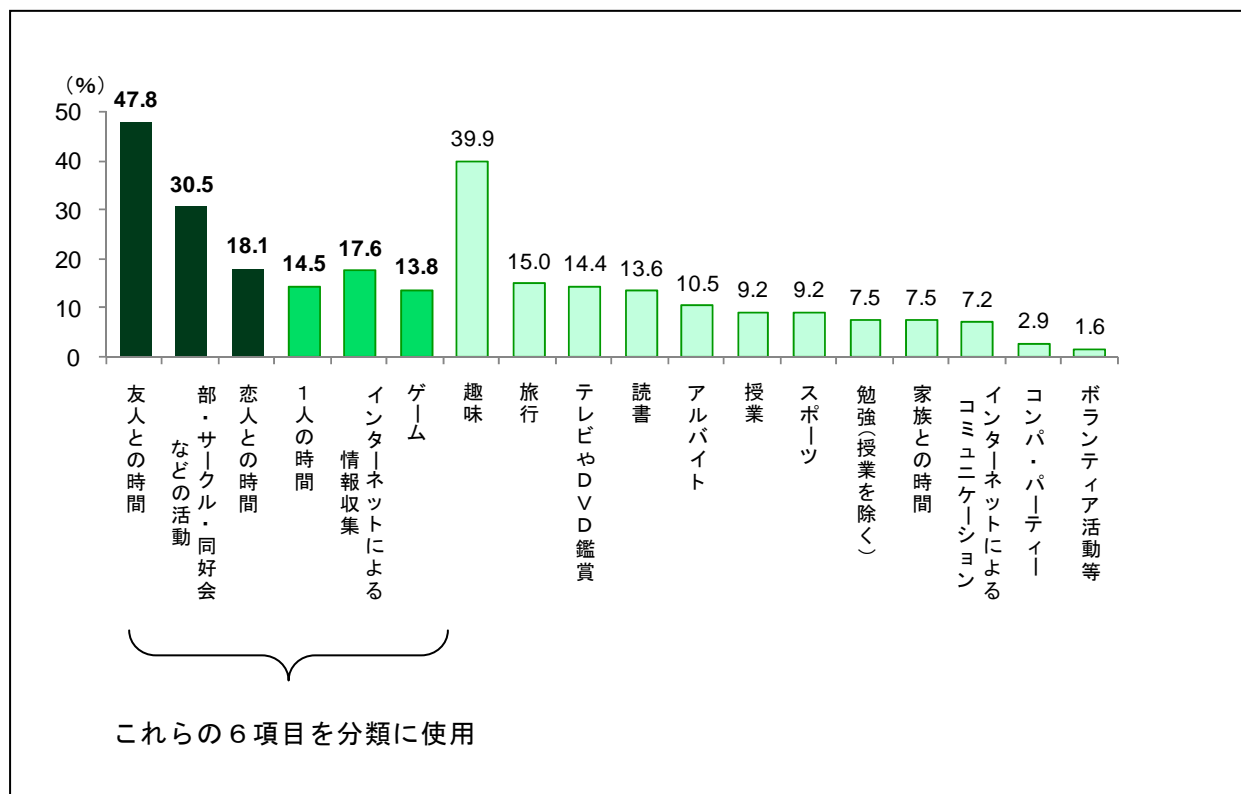
就労や少子化をはじめとする若者に関わる諸問題については、さまざまな分析がなされているが、主に経済環境、就労環境等の外的環境から分析したものが多く、若者自身の考え方や行動に着目して論じたものはそれほど多くない。

今回の調査結果を分析する過程で、性格やタイプによって、就労観や結婚・子ども観等に大きな違いがあることがわかった。

そこで、学生を性格・タイプで分類したうえで分析を進めることとし、今回の設問の中から「特に楽しいと感じること」の回答内容に注目した。この設問には18項目の選択肢が設けられているが、そのうち性格・タイプの違いが表れていると思われる6項目を用いることとした。なお、「趣味」は回答割合の高い項目であるが、1人でする趣味と他人と一緒にやるものが混在するため、タイプ分類の項目からは除外した。

図表4・図表5に示したように、他人との密接な交流を伴う3項目（図表5で○印表示の「友人との時間」「部・サークル・同好会などの活動」「恋人との時間」）のうちいずれかを選択し、かつ1人で楽しむ3項目（図表5で●印表示の「1人の時間」「インターネットによる情報収集」「ゲーム」）を選択しなかった学生を“アクティブ派”、その逆の学生を“インドア派”と名づけた。

図表4 「特に楽しいと感じること」の選択肢（18項目）および総数での回答結果（n=4,120）



図表5 “アクティブ派” “インドア派” の定義

アクティブ派	インドア派
下記のいずれかを選択 ○「友人との時間」 ○「部・サークル・同好会などの活動」 ○「恋人との時間」	下記のいずれかを選択 ●「1人の時間」 ●「インターネットによる情報収集」 ●「ゲーム」
下記のいずれも選択しない ●「1人の時間」 ●「インターネットによる情報収集」 ●「ゲーム」	下記のいずれも選択しない ○「友人との時間」 ○「部・サークル・同好会などの活動」 ○「恋人との時間」

その結果、4,120人の全サンプルのうち、実に7割近くがこの2つのタイプのいずれかに分類された（“アクティブ派” 49.6%、“インドア派” 18.7%）。しかも、その2つのタイプの間には、就労観、結婚・子ども観等について、後述するとおり明確な違いが見られた。

さらに、親から生活面で自立していることが大学生の意識に影響を及ぼしているのではないかと考え、もう1つの分析軸として、“自宅通学生” “ひとり暮らしの学生” という2つの生活スタイルでの分析も試みた。

## Ⅱ 「アクティブ派」と「インドア派」の学生に見られる行動・意識の違い

仲間とワイワイやるのが好きで他人との交流を大切にするアクティブ派と、どちらかといえば1人が好きなインドア派の学生とでは、行動や考え方に違いが認められる。

調査対象全体としては、アクティブ派2,044人（うち男子888人、女子1,156人）、インドア派769人（うち男子452人、女子317人）と、男子より女子にアクティブ派が多く見られ、女子のほうが友人との交流、つながりを大切にする傾向の一端がうかがわれる。

本章では、大学生活や将来の就労・結婚観等の観点から、特にインドア派の特徴についてアクティブ派との比較から紹介する。

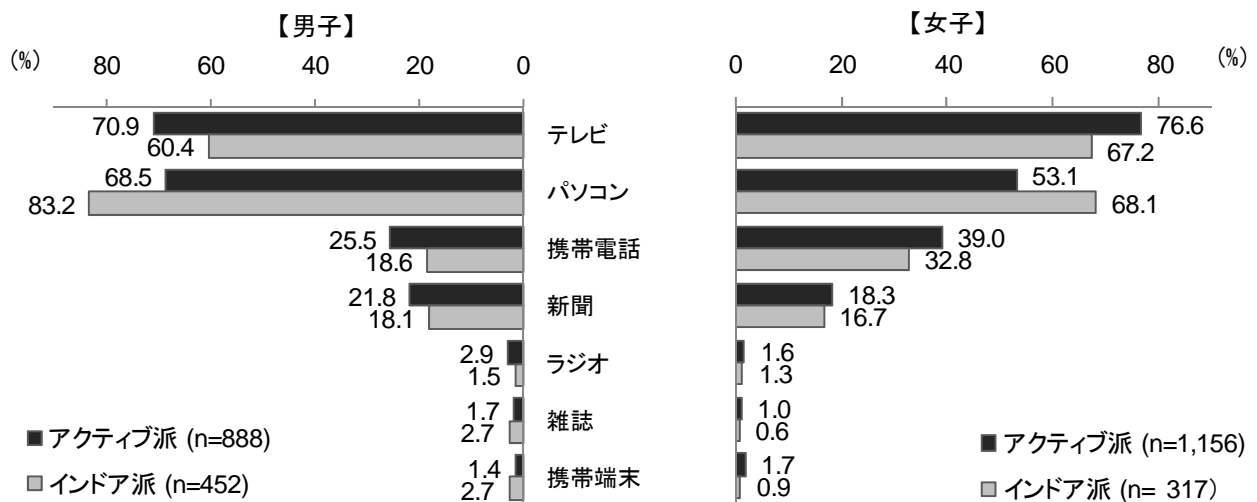
### 1. 日常生活に見られる特徴

#### （1）ニュースなどの情報入手手段

ニュースなどの情報入手手段としてよく利用するものは、アクティブ派が「テレビ」（74.2%）、「パソコン」（59.8%）の順であるのに対し、インドア派は「パソコン」（77.0%）、「テレビ」（63.2%）と、パソコンのウェイトが高い。特にインドア派男子のパソコンは83.2%と顕著で、生活に欠かせないツールとしてパソコンに依存する傾向がうかがえる。

このため、「携帯電話」や「新聞」での情報入手は、インドア派はアクティブ派より、それぞれ 8.7 ポイント、2.2 ポイント低い。他人との交流や外出自体も比較的少ないと見られるインドア派で、コミュニケーションツールの代表格ともいえる「携帯電話」利用が低い結果となったこともうなずける。

図表 6 主な情報入手手段（2つ以内で選択）

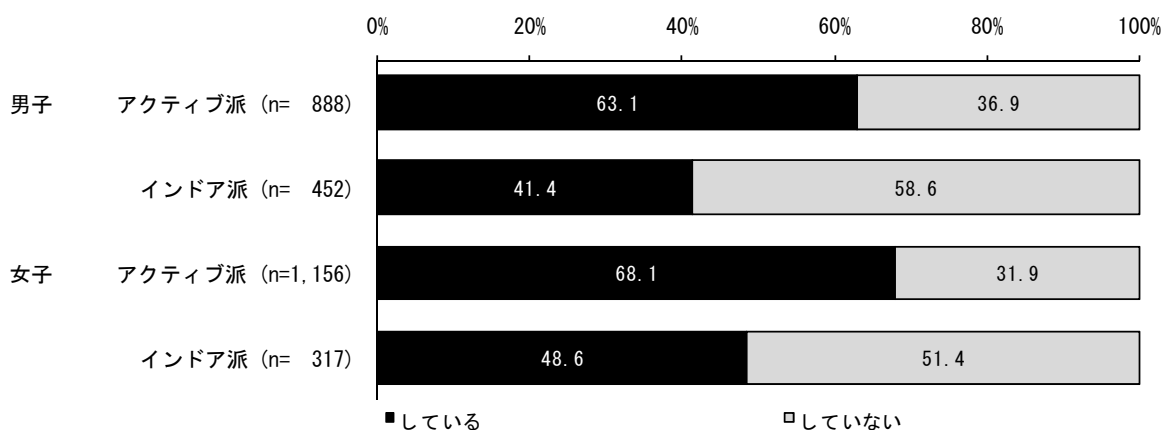


## (2) アルバイト

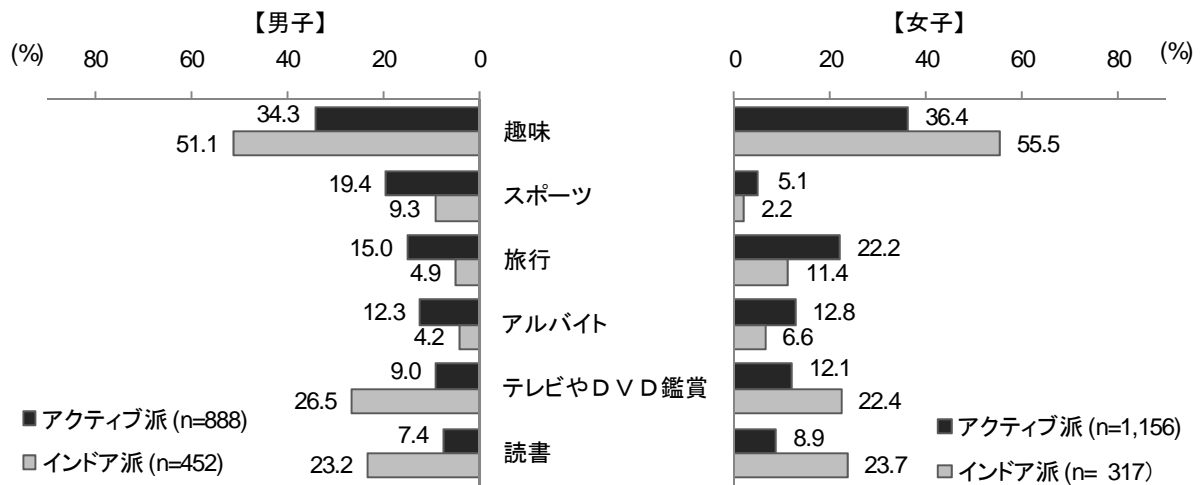
一般的にアルバイトは人と接する機会が多いが、アルバイトをしている割合は、アクティブ派が 65.9% に対し、インドア派は 44.3% と 5 割を下回る。また、「日常生活で特に楽しいと感じること」について、アクティブ派・インドア派の分類に使用した図表 5 の 6 項目以外の項目を見ると、アクティブ派は、「旅行」「スポーツ」といったアウトドア系が相対的に高く、インドア派は「趣味」「テレビや DVD 鑑賞」「読書」などが高い。

インドア派は、人との関わりを好まず、1 人の時間を楽しむ学生が多い実態がこの結果からも確認できる。

図表 7 アルバイトの実施状況



図表 8 特に楽しいと感じる時（アクティブ派、インドア派分類に使用した項目以外から6項目を抜粋）

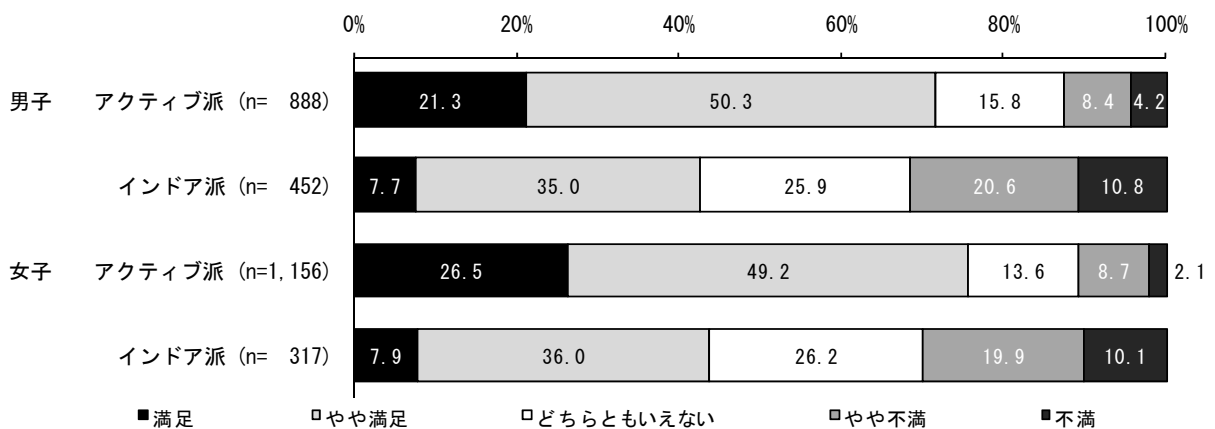


## 2. 大学生活に関する意識

### (1) 大学生活の満足度

アクティブ派とインドア派とでは、大学生活に対する満足度にも違いが見られる。大学生活に「満足」「やや満足」と回答した学生は、アクティブ派が7割強であるのに対し、インドア派は4割強と相当な開きがある。なお、男女間の差は大きくはないが、両派とも女子のほうが男子より満足度がやや高い傾向が認められる。

図表 9 大学生活に対する満足度



大学生活に対する満足度に格差が生じる要因は何であろうか。その糸口として、いくつかの観点から確認してみたい。

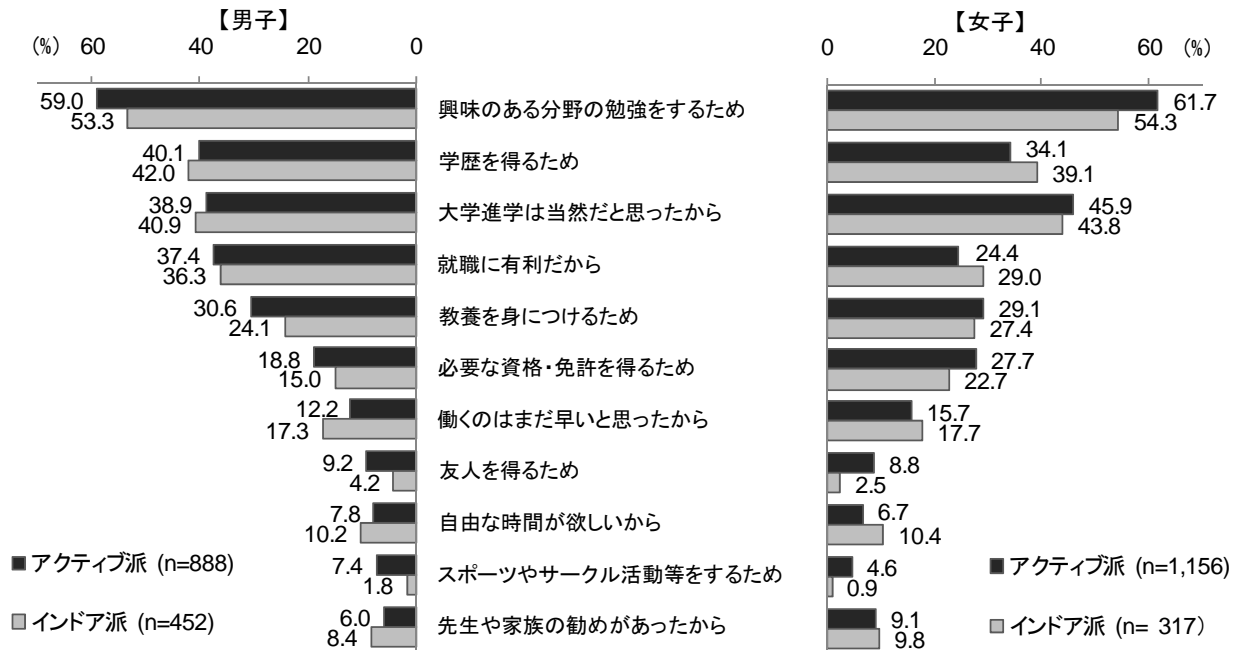
### (2) 大学進学理由

まず、「大学に進学しようと思った理由」について見てみる。

アクティブ派は「興味のある分野の勉強をするため」「教養を身につけるため」「スポーツやサークル活動等をするため」「友人を得るため」などの回答割合が相対的に高いが、

インドア派は「学歴を得るため」「働くのはまだ早いと思ったから」「自由な時間が欲しいから」がアクティブ派より高い。インドア派にとって大学とは、学問のためというより学歴のためのもの、そして社会に出る前のモラトリアムとしての意識が強いのかもしれない。

図表10 大学に進学しようと思った理由（3つ以内で選択）



### (3) 大学生生活から得たもの

また、「大学生生活から得たもの」も、アクティブ派は「プレゼンテーション力」「友人」「恋人」など、外向きの項目が相対的に高く、一方、インドア派は「専門知識」「論理的に考える力」「学歴」といった自分自身に関する項目が高い。

さらに、「部・サークル」への加入割合やアルバイトを行っている割合（前述）もアクティブ派のほうが高い。

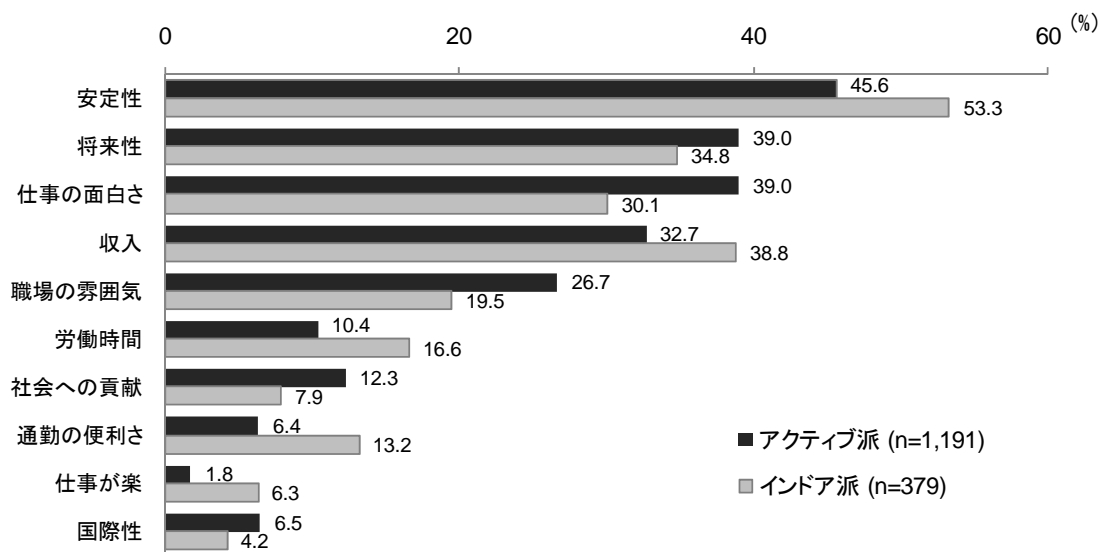
こうしてみると、他人との関わりやそこから得られる喜びや成果の多寡が大学生生活の満足度を左右する一因といえそうである。1人の時間を楽しみを見出すインドア派は、それだけでは本当の意味で大学生生活に満足感を味わえていないのかもしれない。

## 3. 就労に対する考え方

### (1) 就職先を選ぶ際に重視すること

就職先を選ぶ際に重視するポイントについては、アクティブ派は「将来性」「仕事の面白さ」「職場の雰囲気」「社会への貢献」などの回答が高く、インドア派には「安定性」「収入」「労働時間」「通勤の便利さ」「仕事が楽」などが目立つ。自分の成長や他人・社会との関わりを重視するアクティブ派と、労働条件や自分の利益などの実利を重視するインドア派とにはっきり色分けされている。

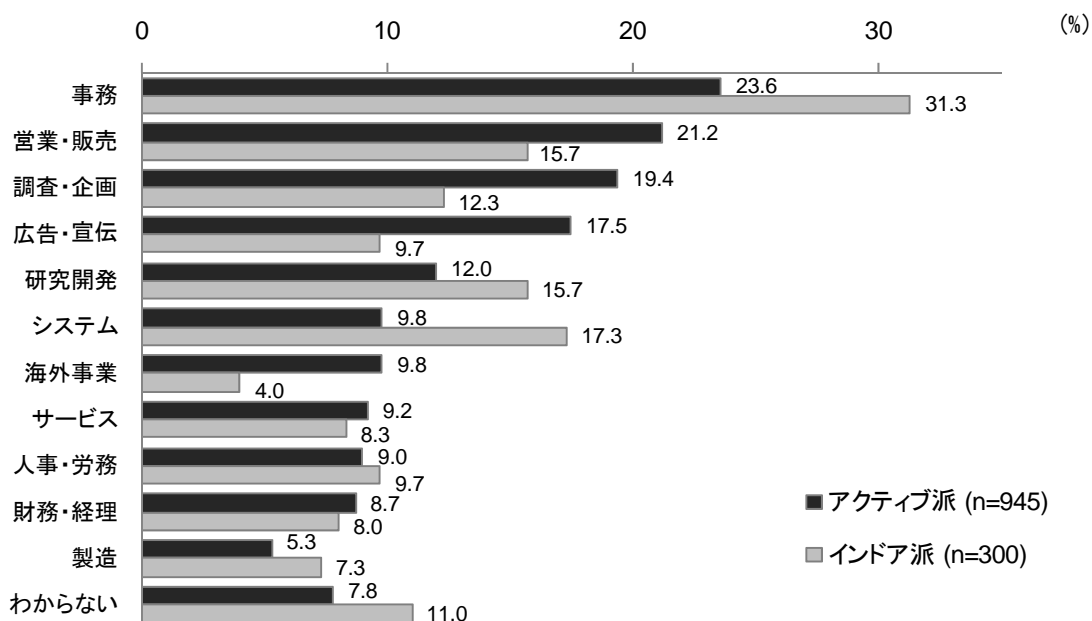
図表11 就職先を選ぶ際に重視するポイント（3つ以内で選択）



## （2）仕事での志望部門

仕事での志望部門は、アクティブ派は、「営業・販売」「調査・企画」「広告・宣伝」「海外事業」部門など、人との接触が多く影響力を発揮しやすい部門を好む一方、インドア派は、「事務」「システム」「研究開発」といった、いわばこつこつ型の部門を好む傾向がある。インドア派には「わからない」の回答も目立っており、将来に対する展望不足や仕事に対する不安などから志望が明確でない学生が多いようである。

図表12 仕事での志望部門（2つ以内で選択）





#### 4. 将来の社会人として求められる資質と仕事をする際の不安材料

##### (1) 社会人に求められる資質

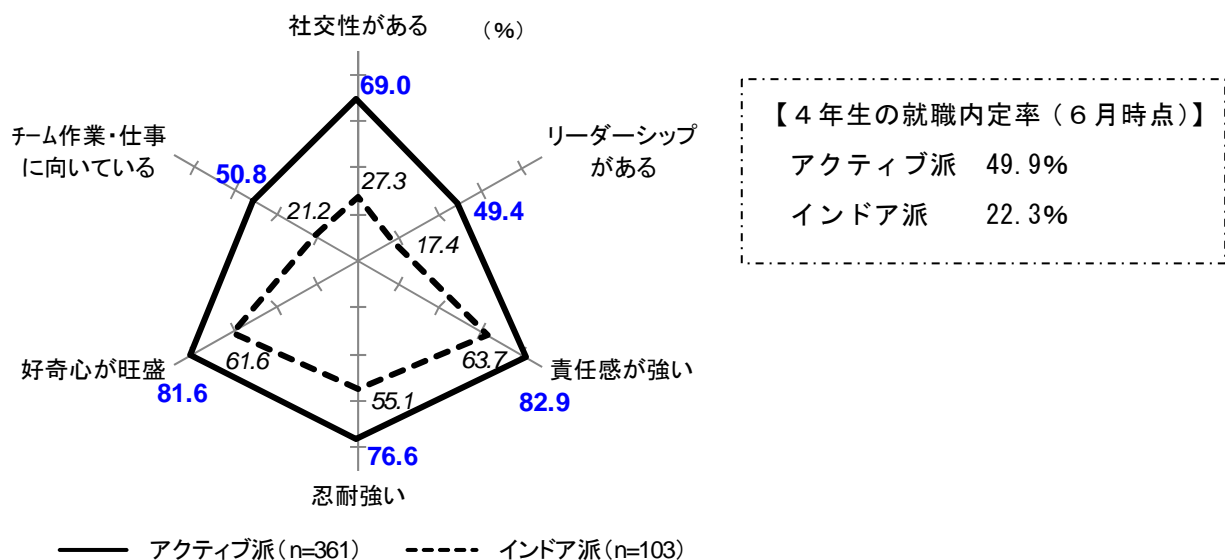
アクティブ派とインドア派では、性格・タイプに顕著な差が見られるが、その違いは、今後社会人として巣立つ学生にとって、どのような意味を持っているのだろうか。大学4年生について分析してみた。

「社交性がある」「リーダーシップがある」「責任感が強い」「忍耐強い」「好奇心が旺盛」「チーム作業・仕事に向いている」の6項目いずれも、「あてはまる」「ややあてはまる」とする回答は、アクティブ派がインドア派を大きく上回っている。

さらに、社会人に求められると想定される『社会への適応力』『コミュニケーション能力』『能力発揮』『周囲からの評価』の4つの資質を構成する要素として、上記の6項目から3項目ずつ割り当て、各資質を100ポイント満点とした指数（図表14の注を参照）で比較すると、アクティブ派の評価点数の平均は66.5ポイント、インドア派は38.1ポイントと30ポイント近い開きが見られた。特に、『コミュニケーション能力』『社会への適応力』などの資質で開きが大きいが、これは「社交性がある」「リーダーシップがある」での差が大きく影響しているといえる。

こうした社会人に求められる資質での差は、4年生6月時点での就職内定率の差（内定率は、アクティブ派49.9%、インドア派22.3%）とも無関係とはいえないだろう。

図表13 性格・タイプ別の自己評価（各項目に「あてはまる」「ややあてはまる」と回答した割合：4年生）



図表14 社会人に求められる資質とアクティブ派、インドア派の評価（4年生）

社会人に求められる 4資質	資質の構成要素	アクティブ派の 評価点数 ①	インドア派の 評価点数 ②	差 (①-②)
社会への適応力 (100ポイント満点)	●社交性がある ●責任感が強い ●忍耐強い	76.2ポイント	48.7ポイント	27.5ポイント
コミュニケーション能力 (同上)	●社交性がある ●チーム作業・仕事に 向いている ●リーダーシップがある	56.4ポイント	22.0ポイント	34.4ポイント
能力発揮 (同上)	●リーダーシップがある ●好奇心が旺盛 ●責任感が強い	72.3ポイント	47.6ポイント	24.7ポイント
周囲からの評価 (同上)	●チーム作業・仕事に 向いている ●リーダーシップがある ●責任感が強い	61.0ポイント	34.1ポイント	26.9ポイント
平均		66.5ポイント	38.1ポイント	28.4ポイント
4年生の就職内定率（6月時点）		49.9%	22.3%	27.6ポイント

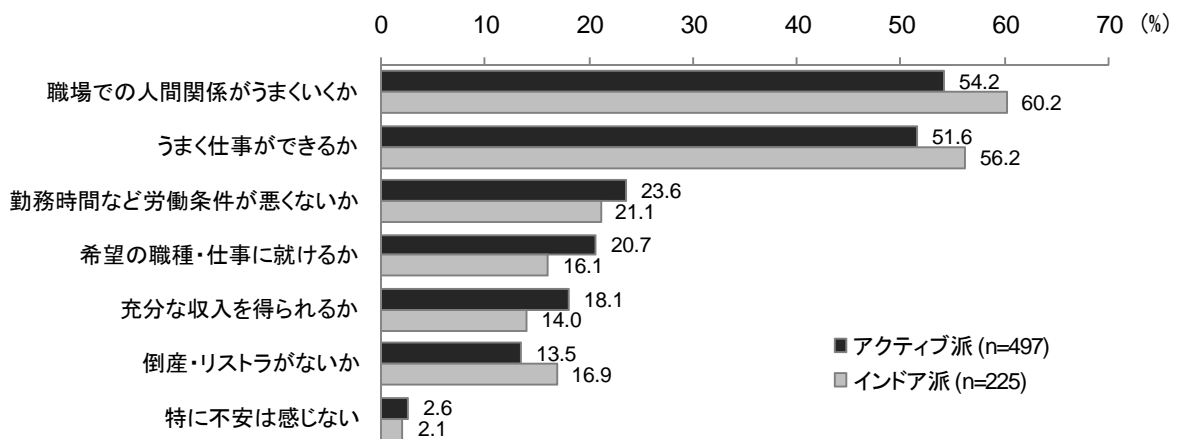
注) 評価点数：各資質を構成する3つの要素にそれぞれ「あてはまる」「ややあてはまる」と回答した割合を合計し、3で割った数値（100ポイント満点）。

## (2) 仕事をする際の不安

仕事をすることを想定した場合の不安については、アクティブ派は「希望の職種に就けるか」など、自己の能力発揮に関する観点であるのに対し、インドア派は「職場での人間関係がうまくいくか」「うまく仕事ができるか」「倒産・リストラがないか」といった、自己の能力への不安に関するものが多い。

なお、上述の「社会人に求められる資質に関する評価点数」や「仕事をする際の不安」に関しては、1～4年生全体で見ても、両派にはほぼ同様の違いが見られた。

図表15 社会に出て仕事をするを想定した場合の不安（4年生）

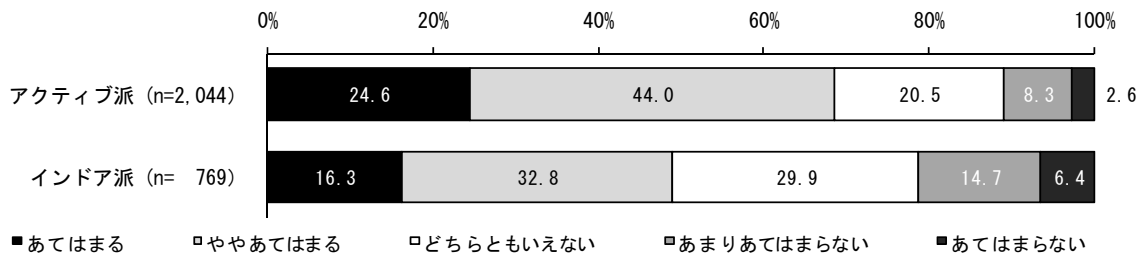


## 5. 社会や結婚・子どもに対する意識の違い

### (1) 社会貢献に対する意識

「社会に貢献したいと考えているか」に対して、「あてはまる」「ややあてはまる」と肯定する割合は、アクティブ派の68.6%に対し、インドア派は49.1%にとどまっている。

図表16 「社会に貢献したいと考えている」



### (2) 結婚や子どもに対する意識

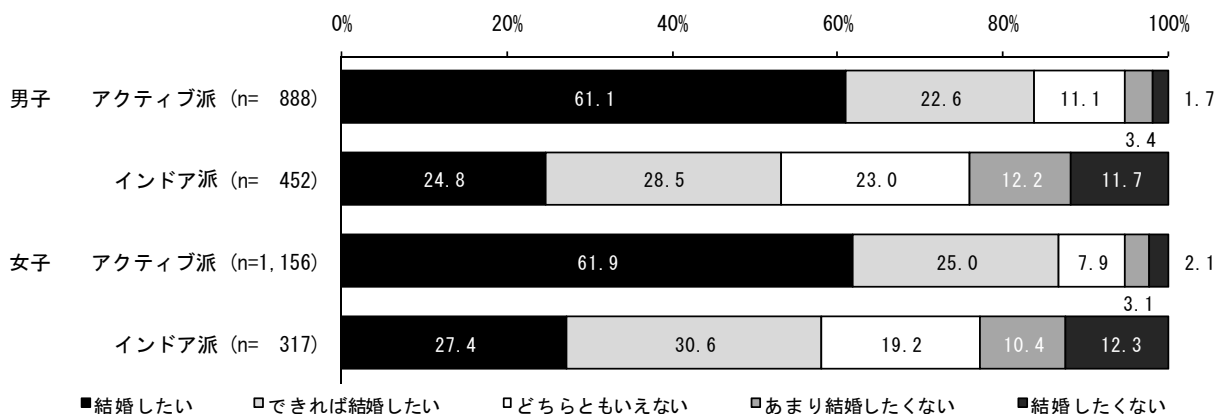
結婚や子どもに対する意識にもアクティブ派とインドア派とでは大きな相違が見られる。

アクティブ派は「結婚したい」が61.6%（男子61.1%、女子61.9%）であるのに対し、インドア派は25.7%（男子24.8%、女子27.4%）と4人に1人であり、「できれば結婚したい」を含めてもアクティブ派の85.6%に対し、インドア派は55.1%と半数程度。

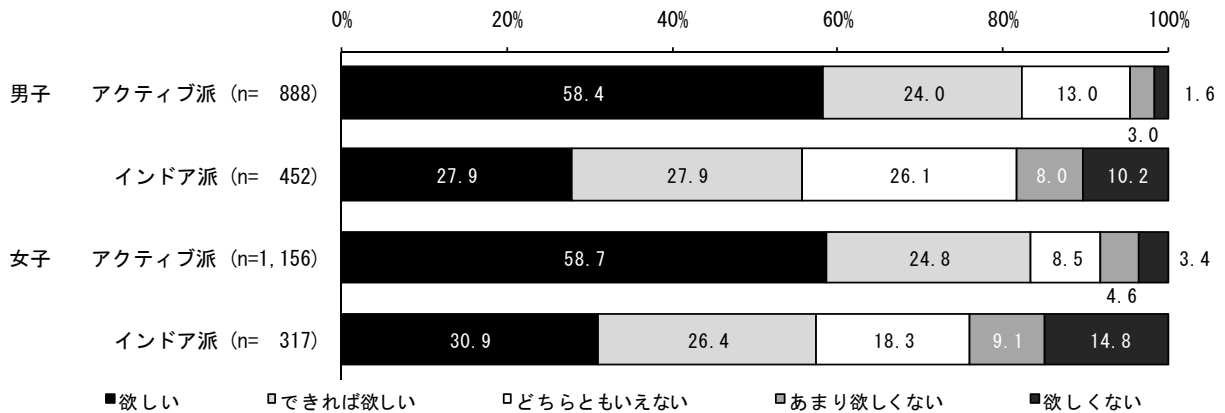
また、「子どもが欲しいと思うか」についても、「欲しい」「できれば欲しい」はアクティブ派の83.1%に対し、インドア派は56.5%と、消極的な学生が目立つ。

子どもが欲しくないとする学生がその理由として「将来が子どもにとって良い社会ではない」とする回答もインドア派のほうが高く（インドア派14.6%、アクティブ派6.8%）、インドア派の社会への関心の低さ、期待の低さが感じられる。

図表17 結婚（事実婚を含む）に対する考え方



図表18 子どもを持つことに対する考え方



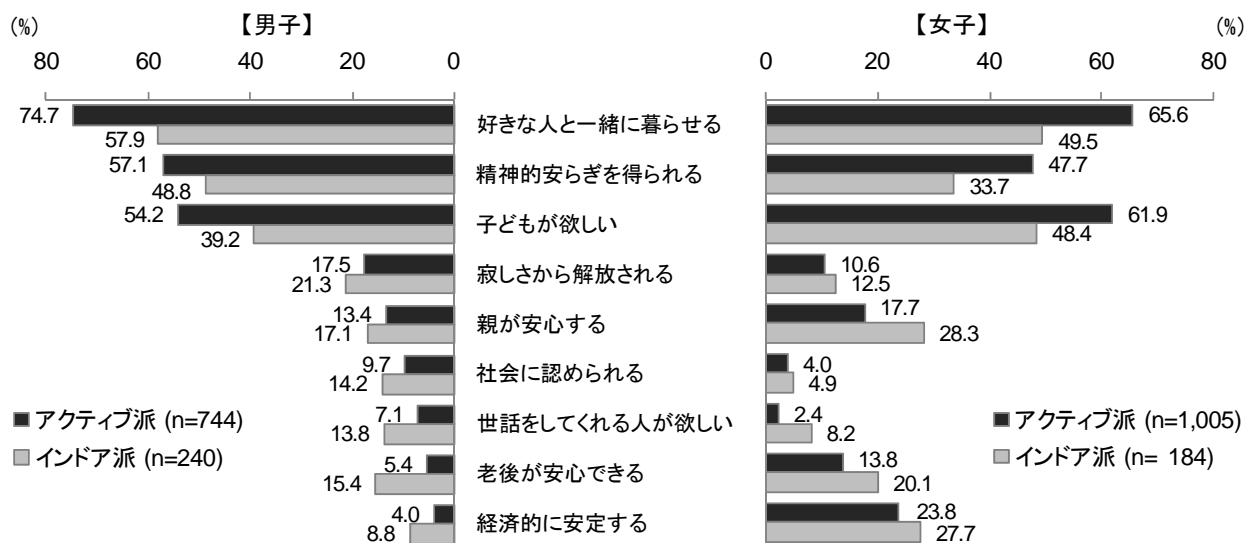
アクティブ派とインドア派とで、結婚や子どもに対する考え方がこれほどまでに違うのはなぜであろうか。

上述のとおり、インドア派は1人の時間や自由を望み、性格タイプのにも「内向き」「自分に自信が持てない」といったことが要因の1つであろう。しかし、結婚したい理由や子どもが欲しい理由に対する回答を観察すると、どうやらそれだけにとどまらないようである。

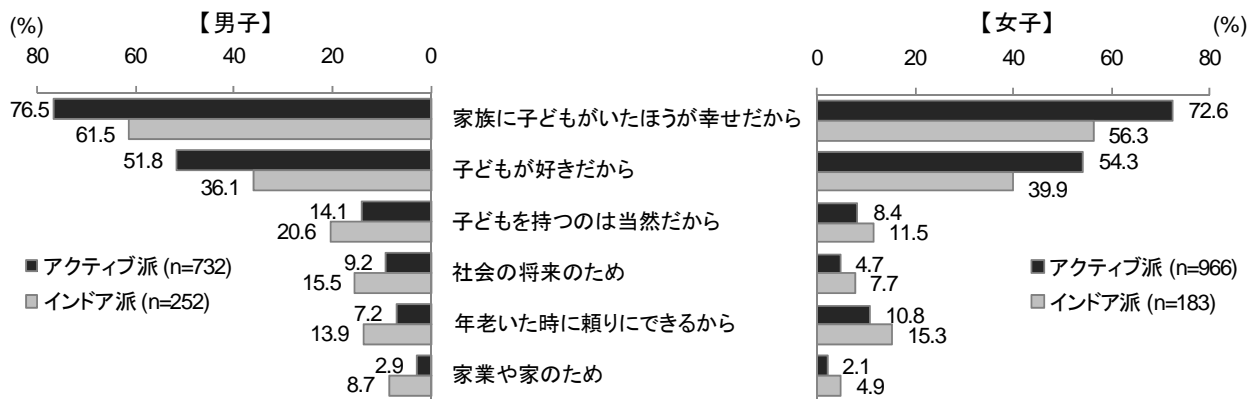
結婚したい理由は、アクティブ派では「好きな人と一緒に暮らせる」「精神的安らぎを得られる」「子どもが欲しい」といった“愛情”に基づく項目の回答が相対的に多いのに対し、インドア派では、結婚に前向きな学生であっても「親が安心する」「老後が安心できる」「世話をしてくれる人が欲しい」など、実利的な面から結婚を考える傾向が強い。

また、子どもが欲しい理由についても、アクティブ派は「家族に子どもがいたほうが幸せだから」「子どもが好きだから」とする回答が相対的に多いのに対し、インドア派では「年老いた時に頼りにできるから」など、ここでも実利的な面からの回答が多く見られる。

図表19 結婚したい理由（図表17で「結婚したい」「できれば結婚したい」と回答した人。2つ以内で選択）



図表20 子どもが欲しい理由（図表18で「欲しい」「できれば欲しい」と回答した人。2つ以内で選択）



### Ⅲ 自宅通学生とひとり暮らしの学生

今回の調査対象の学生のうち、55.1%が親元から通学、40.5%が親元から離れアパートなどでひとり暮らしをしていた（以下、前者を「自宅生」、後者を「単身生」という）。なお、残りの4.4%は学生寮などで生活している。

日常の生活環境が異なる自宅生と単身生とを比較したところ、両者間には性格や考え方にいくつかの相違点が認められた。

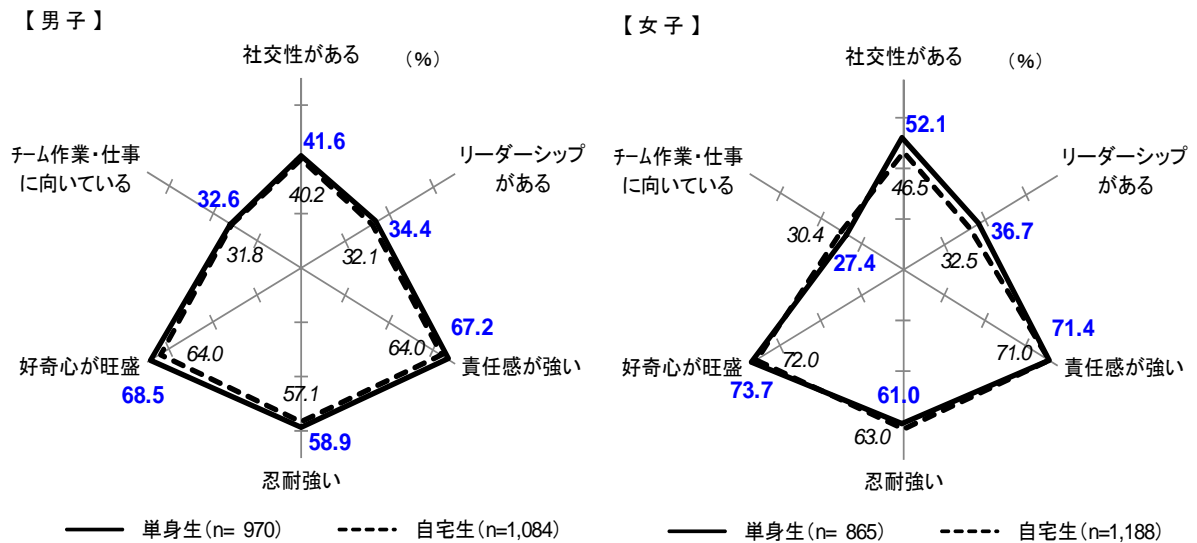
#### 1. 性格の自己評価

「社交性がある」と自己評価する学生の割合は、女子では単身生が自宅生を上回っている。自宅生の中には、日常は親元と大学の往復に終始し、他人と接触する機会が乏しい学生も多いことが一因と考えられる。これは女子に特徴的に表れた傾向で、男子にはほとんど差は見られない。

一方、「好奇心が旺盛」と「責任感が強い」は男子に両者の差が見られ、いずれも単身生のほうがやや高い。親の傘の下から出て1人で生活する中で外向きの意識が生まれ、さらに、自力で判断する経験を重ねることで責任感が培われる面があると考えられる。

また、自分は「忍耐強い」と思っている学生の割合も、多少なりとも世間の風にあたりやすい単身生のほうが若干高かった。

図表21 性格・タイプに関する自己評価（各項目に「あてはまる」「ややあてはまる」と回答した割合）



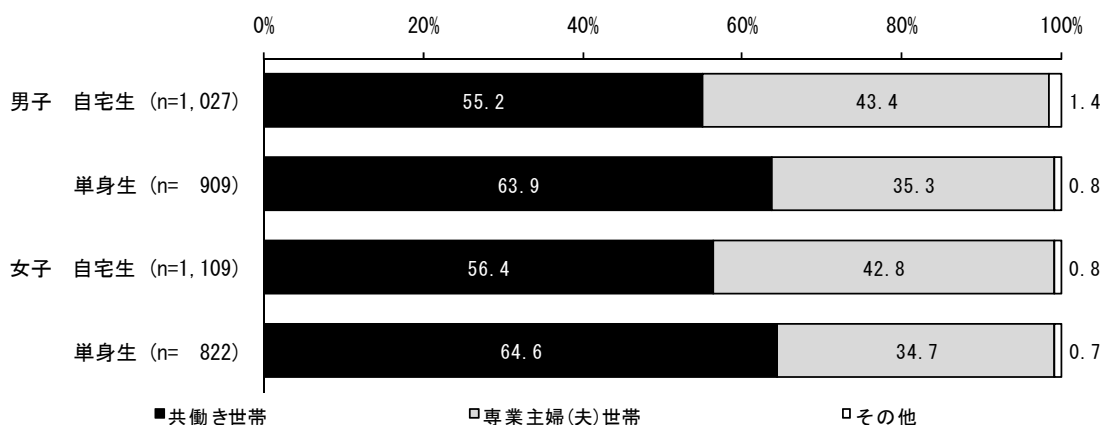
## 2. 生活の現状

今回調査した大学生全体で見ると、6割の実家が共働き世帯、4割が専業主婦(夫)世帯である。しかし、自宅生と単身生には差があり、自宅生のほうが単身生より専業主婦(夫)世帯の割合が8ポイントほど高い。

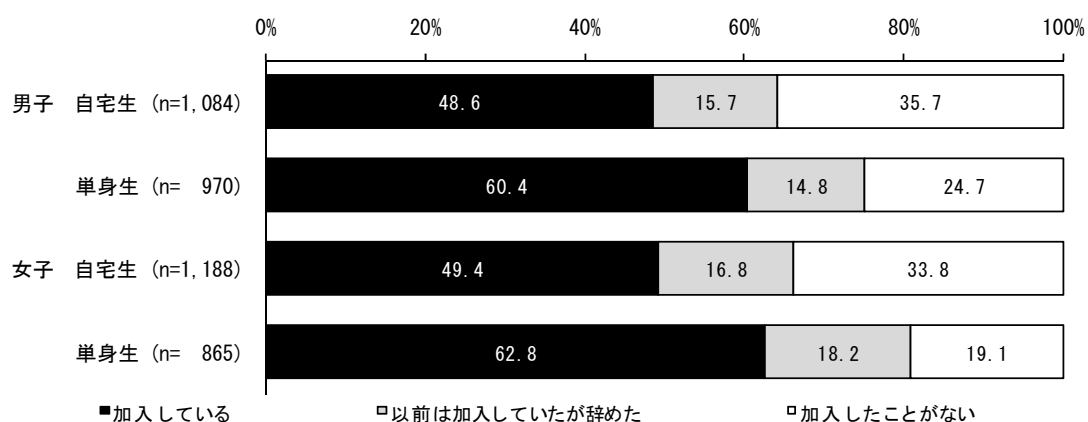
部やサークル・同好会への加入状況にも、両者の差が見られた。単身生の加入率が約6割であるのに対し、自宅生のそれは5割を若干下回っている。ひとり暮らしの学生のほうが、他人との関係づくりに積極的な様子が見える。

交際中の異性がいる割合も、ひとり暮らしののほうが高い。部やサークルの加入率と同様の理由に加え、ひとり暮らしの女子の割合の高さから見ると、親の目が届かない自由さも手伝っているものと思われる。

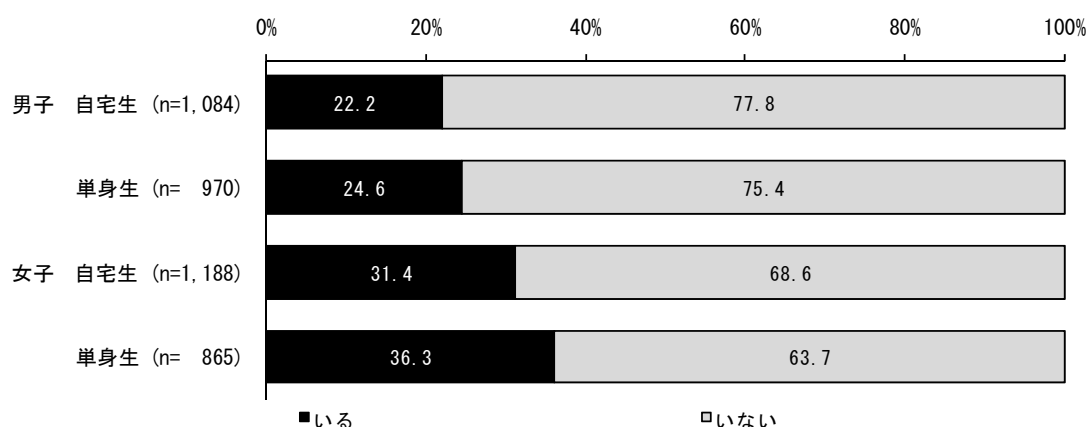
図表22 実家の形態（親の就労状況）



図表23 大学の部・サークル・同好会への加入状況



図表24 交際している異性の有無

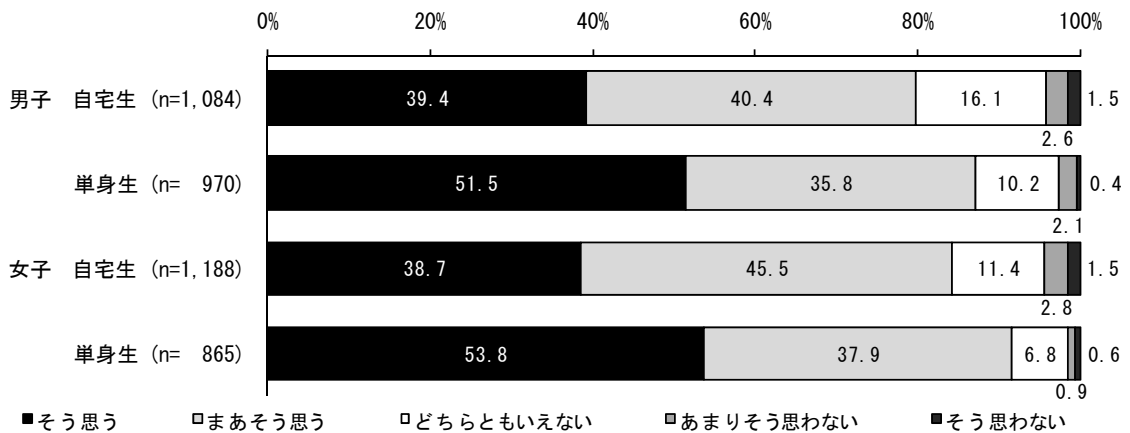


### 3. 社会との関わりについての考え方

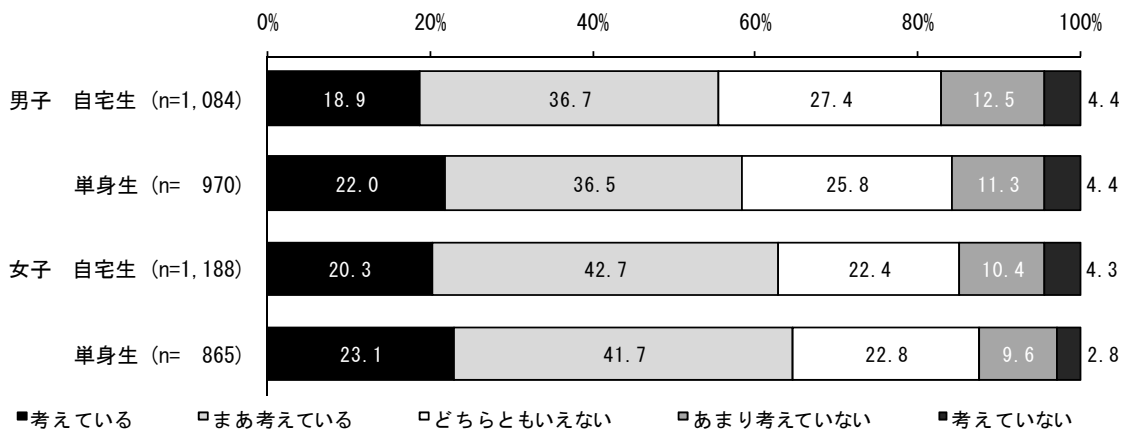
「学校を卒業したら経済的に自立すべきだと思う」に対し、単身生の半数以上が「そう思う」と積極的に肯定したのに対し、自宅生は4割弱にとどまり、10ポイント以上の差が見られた。「まあそう思う」も含めた肯定派の割合は、男女とも単身生が自宅生を7.5ポイント上回っている。特に肯定派が9割を超えるひとり暮らしの女子の自立志向の強さが際立つ。

「社会に貢献したいと考えている」に対する回答にも両者の差が見受けられる。「考えている」と積極的に肯定した割合は、単身生が自宅生を男子では3.1ポイント、女子では2.8ポイント上回った。

図表25 「学校を卒業したら経済的に自立すべきだと思う」



図表26 「社会に貢献したいと考えている」



#### 4. 結婚や子どもに関する考え方

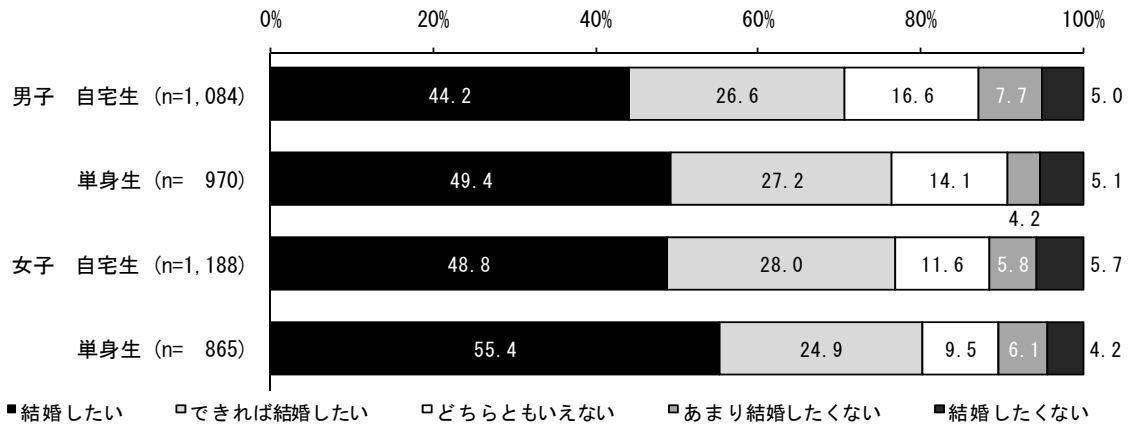
「結婚したい」とはっきり答えた割合は、単身生が自宅生を上回っている。特に女子ではその差が6.6ポイントある。結婚を希望する割合（「結婚したい」と「できれば結婚したい」）を見ると、女子では単身生が80.3%であるのに対し自宅生は76.8%、男子はそれぞれ76.6%、70.8%と、やはり単身生の数値が高い。

子どもが欲しいと思っている割合にも結婚と同様に単身生が自宅生を上回る傾向があり、両者の差は結婚よりもさらに顕著である。

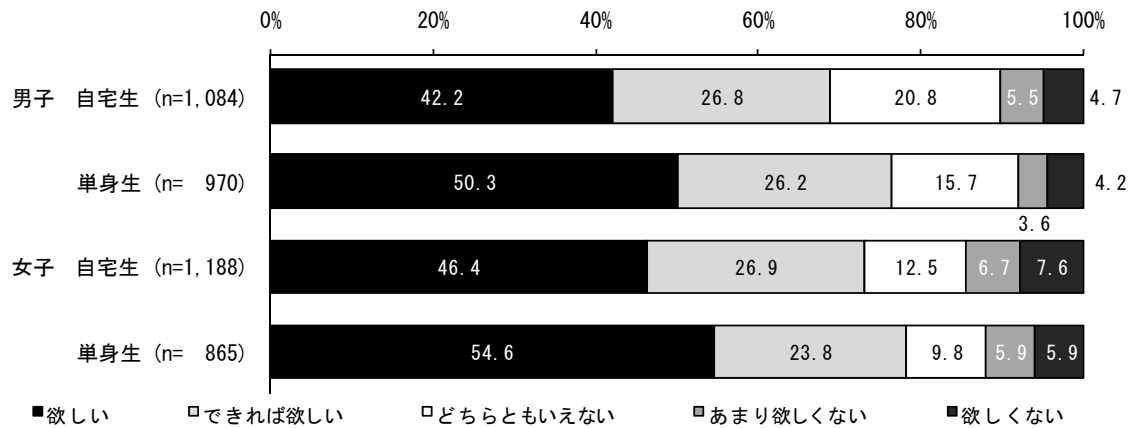
ひとり暮らしを経験することによって、家族の温もりが恋しくなり、結婚や子どもを持つことに前向きになることが考えられる。子どもが欲しいとした学生が挙げたその理由では「家族に子どもがいたほうが幸せだから」が最多だったが、中でも単身生の選択率の高さが、それを裏付けているといえよう。



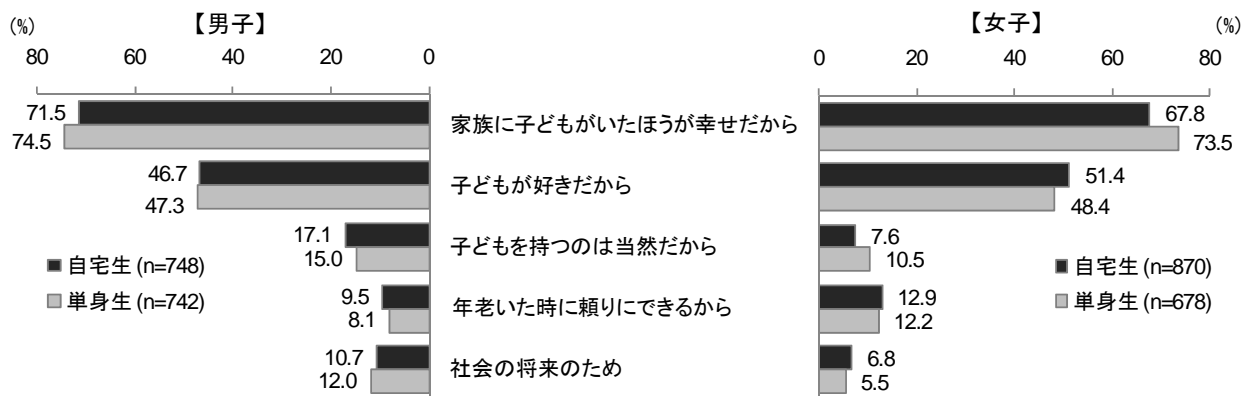
図表27 結婚（事実婚を含む）に対する考え方



図表28 子どもを持つことに対する考え方



図表29 子どもが欲しい理由（図表28で「欲しい」「できれば欲しい」と回答した人。2つ以内で選択）



## IV ひとり暮らし、そしてアクティブ派へ

### 1. インドア派と自宅生に見られる課題点

大学生を第II章ではアクティブ派とインドア派、第III章では自宅生と単身生のグルー

---

ブにそれぞれ分類し、性格や考え方の特徴を分析してきた。これらのグループのうち、将来の就労や結婚といったライフステージを見据えた際に課題点が多いと考えられるインドア派と自宅生について、その特徴を改めて整理してみる。

### (1) インドア派

社交性、リーダーシップ、責任感、忍耐強さ、好奇心の強さといった性格面の自己評価、また、1人よりチームで仕事をするのが向いていると考える割合が、アクティブ派に比べて著しく低い。ここから、社会人となった際の職場への適応、職場内での上司や同僚とのコミュニケーション、能力発揮等の面で、アクティブ派に比べて相対的に見劣りし、不利な評価を受けることが心配される。

また、結婚や子どもを持つことに対する考え方がアクティブ派に比べて消極的な学生が多く、結婚に前向きな人でも、感情や愛情よりも、やや打算的ともとれる理由（結婚では「親の安心」「経済的安定」「老後の安心」、子どもでは「子どもを持つのは当然」「年老いた時に頼りにできる」）を挙げる割合がアクティブ派に比べ高い。親からの経済的な独立に対しても、消極的な学生が相対的に多い。

結婚や出産に対してメリットとデメリットを秤にかけて判断したり、できるだけ独立を先送りしたいと考える若年者が増えれば、少子化にさらに拍車がかかることが懸念される。

もっとも、インドア派も興味のある分野では集中力を発揮し努力を厭わず、パソコンなどのシステム分野等では強みを発揮するケースがあるなどの良い面もある。そうした強みも活かしつつ、コミュニケーション力等の社会人としての適応性を磨けばステップアップできる可能性が高まるものと考えられる。

### (2) 自宅生

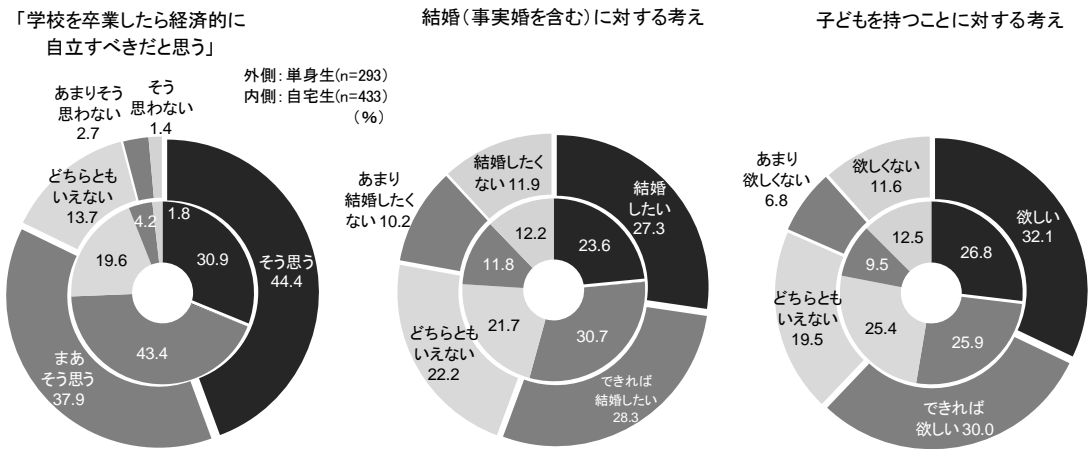
自宅生と単身生との間には、インドア派とアクティブ派の違いほど顕著ではないものの、差が見られた。自宅生にはインドア派との類似性、すなわち、社会人として一般的に必要なといわれる資質が相対的に弱く、結婚や出産への積極度がやや低い傾向が認められたのである。また、親からの経済的な独立意欲の低さは著しく、インドア派のそれとほぼ同等であった。

## 2. まずはひとり暮らしから

インドア派に課題点が目立つとはいうものの、性格やタイプは一朝一夕に変わるものではない。

しかし、図表 30 に示すように、インドア派の中にあっても、単身生のほうが自宅生よりも自立心に富み、結婚や出産に前向きな傾向を示している点に注目したい。経済的負担という問題はあるが、まずは自立心の醸成に向けた第一歩として、親元から離れてひとり暮らしをしてみるのも一法かもしれない。

図表30 インドア派の経済的自立や結婚・子どもに対する考え方（単身生、自宅生）

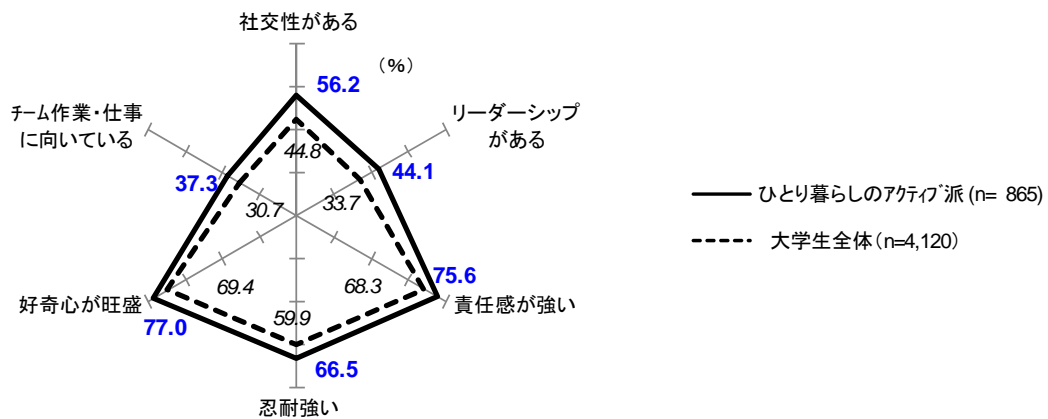


### 3. そしてアクティブ派へ

図表31は、社会人に求められると考える資質に関連する6項目について、「あてはまる」または「ややあてはまる」と回答した学生の割合を、アクティブ派でかつひとり暮らしである学生と、大学生全体とで比較した結果である。

ここまでの考察から容易に想像できるが、アクティブ派でかつひとり暮らしである学生は、全てにおいて大学生全体の平均を上回っている。特に、社交性とリーダーシップについては10ポイント以上の差が見られ、対人コミュニケーションの面での優位さが際立っている。

図表31 性格・タイプに関する自己評価（各項目に「あてはまる」「ややあてはまる」と回答した割合）

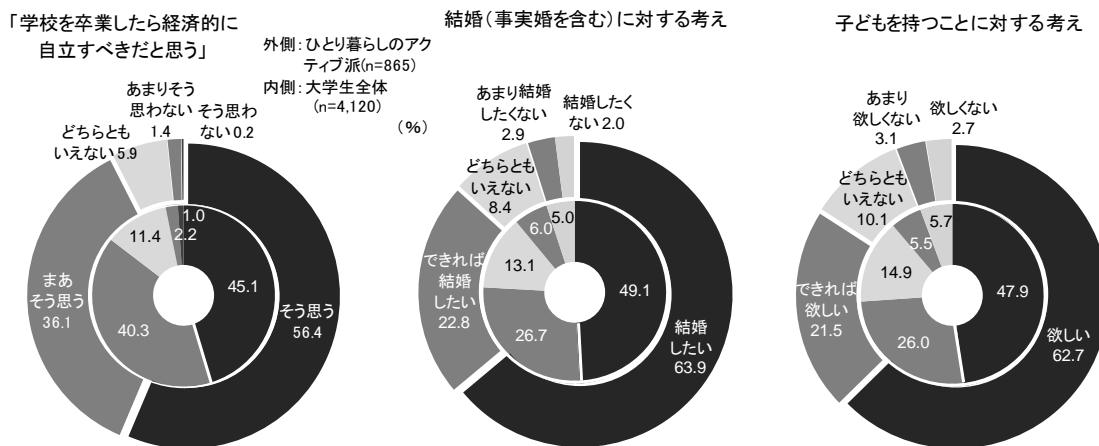


さらに、図表32に示すように、親からの自立や結婚、子どもを持つことに対して、前向きに考える学生の割合が大学生全体の平均を大きく上回っていることがわかる。勿論、結婚や出産に対する考え方が、社会人になってからの就労環境や収入などの影響を受けて変化していくことは否定できない。しかしながら、大学生の時点でこれだけの大差が生じているということは、将来に向けてこの傾向が一定程度継続すると考えるほうが自然であろう。

自宅生がひとり暮らしをしてみることやインドア派がアクティブ派に変化することが、

自立心あふれ社会人としての適応性に優れる若者の増加に寄与し、少子化へのブレーキとして作用することが期待できるといえないだろうか。

図表32 ひとり暮らしのアクティブ派の経済的自立や結婚・子どもに対する考え方



#### 4. さらに環境づくりも

SNS (コミュニティ型の web サイト) や Twitter、Skype (インターネット電話サービス) など、パソコンや携帯電話を通じたコミュニケーションツールはますます多彩になり、自宅に居ながらも社会との関係を築くことができると考える人も多いだろう。しかし、今回の調査結果に表れたインドア派の社会適応性の危うさは、他人とのリアルな交流の重要性を示唆していると思わざるを得ない。大学生には、自らの意識を外に向け、サークルに加入したり、アルバイトをするなど、進んで他人と接する機会を増やすことを望みたい。

勿論、本人の意識改革だけではなく、それを支える周囲の環境づくりも欠かせない。特に大学や自治体には、インドア派の学生でも参加してみたくなるような魅力的でかつ敷居の低い交流イベントの企画を望みたい。

加えて、重要なことは親の意識改革ではないだろうか。子どもが大学生や社会人になっても自分のそばに置いておき、何かと面倒を見たがる子離れができない親は多い。しかし、それが子どもの自立心の芽を摘み、「パラサイトシングル」を生んでいることを親はもっと自覚する必要があるだろう。

親の側が意識的に子離れをし、できれば大学時代から子どもにひとり暮らしをさせることが、わが子の将来のためにプラスになるという考えを持つことが、一人ひとりの親にとって非常に大切であると考えます。

#### 【引用・参考文献】

- ・『「婚活」現象の社会学』(山田昌弘中央大学教授編著)
- ・「結婚・家族形成に関する調査報告書」(2011年3月内閣府)